

長谷川宏一(環境教育・森林計測) 村山史世(地域政策・生物多様性情報学) 福井智紀(生物教育・科学技術社会論)

研究の背景

★2030年までに生物種の減少を食い止め、回復軌道に乗せようとすることを**ネイチャーポジティブ (Nature Positive)** と言います。この言葉は2021年のG7サミットで採択された「2030年自然協約」で国際的に合意され、2023年に閣議決定された「**生物多様性国家戦略 2023-2030**」でも高らかに謳われています。

★その実現のためには生き物の住処となる森を、多様で豊かな環境にしなければなりません。しかし日本は今、戦後に植林され管理の行き届かなくなったヒノキ林やスギ林がたくさんあります。これらは「**生き物の住処**」になるどころか、斜面崩壊などの「**災害の温床**」になってしまっています。このプロジェクトでは、そんな人工林になってしまった自分たちの学校の持つ**森林の再生**に取り組む中高生を支援し、共に**持続可能な森づくり**を考え・実践します。



再生の舞台となる学校林 (2026年5月9日撮影)

アプローチ

★「森を守ろう」という活動は全国各地でNPOなどによって行われています。一方そのような活動を継続させるためには、その活動の効果を、目に見える形で示してあげることが必要です。このプロジェクトでは、**レーザーやドローンなど最新の機材も使って、「森林の現状と変化を記録に残す」**ことにも取り組みます。取得したデータをもとにしながら、「**10年後、20年後、どんな森にしていきたいのか?**」を考える中高生をグループワークで支援します。

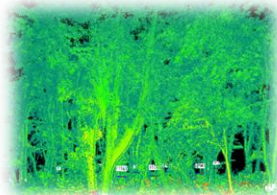
★光を入れるために伐採した木は、約1年以内に何かに利用しなければ、腐ったり虫が履いたりしてしまいます。ここに**経済的価値を生み出す**ことも、中高生と共に考え、実践します。

期待される結果

森林の構造が変化し、多様な環境を生成するようになるには、数十年という長い月日が必要です。一方で、例えば光を入れるために間引き(間伐)をすれば、その直後に樹木は枝葉を大きく広げ、地面では今まで眠っていた種から芽が生えだします。日向を好む小さな虫も集まりはじめます。そういったすぐ見える**変化を記録し、中高生とともに発見してください。中高生の森林再生活動に対するモチベーションを高め、その意義を社会や学校に伝え、環境活動の持続性に貢献することが、期待される結果です。**



レーザー観測の様子



募集方法

森林の点群データ(長野県アファンの森) →

10月初旬に、先にこのプロジェクトに参加している大学生・大学院生(3~4人)を含めて面談を行います。また、この研究に参加される方は、11月22日(日)に予定されている、中高生と合同での間伐体験に現地参加(埼玉県毛呂山町に日帰り)できるように予定を調整してください。森に入ることが好き、人と接することが好き、という学生さんをお待ちしております。教職課程の学生さんであればなお歓迎ですが、教職課程を履修していない学生さんも、意欲ある方は歓迎します。中高生に対し生き物や自然への愛情を伝えられる。節度を持って、お手本となる立ち振る舞いとれる方を募集します。